

(会長講演)現場における患者の意思決定を支える取り組み

著者名	川崎 敬子
雑誌名	東京女子医科大学看護学会誌
巻	18
号	1
ページ	33
発行年	2023-03-31
URL	http://doi.org/10.20780/00033411

現場における患者の意思決定を支える取り組み

川崎 敬子

(東京女子医科大学附属八千代医療センター 看護部長)

人生 100 年時代と言われるようになり、誰もが支え合う共生社会を実現し、住み慣れた場所で人生の最期を迎えることができる地域包括ケアシステムの深化を目指している。医療者である私達が、患者や家族等を支え、その人らしい生活そして人生を送るために、支援できることについて、改めて考えていきたい。

エンド・オブ・ライフケアを考えるうえで、Advance Care Planning : ACP がある。将来の医療・ケアについて、本人と家族等と医療・ケアチームが対話を通じ、本人の人生観や価値観、希望を共有し、意思決定を支援するプロセスである。本人による意思決定が困難になった場合も、本人の意思を汲み取り、本人の望む医療・ケアを受けられるように支援する。患者の思いに触れ、人生を振り返り、これまで大切にしてきたこと、大切にしていきたいことを知り、不安や気がかりに感じることを受け止め、生きる意味や拠り所を見出し、その人らしく生きるために、家族も含め少しでも納得できるように支援していく。

患者の大切にしていることや不安や気がかりを捉えるために、日ごろから患者の思いや考えを聴き、言葉を集める。入院・治療の説明時や指導・教育の際、退院検討時など、急性期病院での限られた機会に傾聴するなかで意思や意向を汲み取り、記録に残し、共有できるように繋いでいく必要がある。本来であれば、手術等の治療上のイベントが終わり、外来通院中や在宅療養中の安定した時期に、将来に備えた話し合いが持てることが望ましいが、入院中の退院後の療養場所を選考する際や差し迫った終末期に検討する機会が多い現状にある。日々、私達は多職種でのカンファレンスを実施し、治療・ケアの方向性について検討しているが、ACP の視点でのディスカッションを行い、患者・家族とともに多職種で方向性を見出していきたい。

患者の大切にしていることや不安や気がかりを捉え支えることは、患者の尊厳を守ることである。これまで、「臨床倫理に関する方針」「東京女子医科大学 3 病院における人生最終段階における医療・ケアの指針」を策定し、他者の隠れた背景を捉え深く相手を理解するためにトラウマインフォームドケア、内省を促すためにリフレクション演習、倫理的な疑問を感知し整理するためにジョンセンらの 4 分割表を使用した検討、看護倫理委員会での倫理的な疑問や気づきを経験した事例分析等を進めてきた。今年度には、医療チームにおいて倫理的葛藤が生じた際に、組織的な解決策を探る倫理コンサルテーションチームを始動した。これらの学習を踏まえ、ACP を実践し患者の生活や人生を支えるケアを一步進めていきたい。